

中国の政治体制や歴史を学ぶ

岐阜県日中友好協会の第1回『ぎふ・中国くるぶ交流講座』は5月25日、岐阜市の朝日大病院ホールであり、杉本勝則氏（北京外国語大学北京日本学中心客員教授、アジア・ユーラシア総研客員研究員）の「この目で見た中国とその歴史と体制」と題する講演に、80余人が耳を傾け、日本と比較しながら中国の政治体制や歴史、国民性や考え方などを学んだ。

『聴く』『交わる』『学ぶ』をキーワードに、日

杉本氏は元参議院法制主幹で定年退職後、対外経済貿易大学客座教授兼語学留学生として北京に住みながら中国各



中国の政治体制や歴史に理解を深める参加者

中両国の相互理解のきっかけにしてもらおうと無料で一般市民にも公開し、本年度から参加者同士の交流の機会を新たに加えた。

北京外語大客員教授・杉本氏講演

第1回ぎふ・中国くるぶ交流講座

地を見て歩いた貴重な経験を持つ。現在は日中関係学会理事、中国留学生交流支援立志会副理事長として日中関係の研究、若者交流に携わっている。

杉本氏は、異民族が入れ乱れ、王朝が変遷した三千年の歴史や共産党統治下の実像にも触れ、中国人の行動原理や死生観の日本人との違いを解説した。「中国は異質の国ではない。日本とは制度、体制の全く違う国であることをまず認識すべきだ。例えば尖閣問題は、体制の違いに気づかないままの『相互誤解』の積み重ねが日中関係を悪くした例といえる」とした上で、『相互理解』に向けて「人と人との交流を通して違いを知り、受け入れることから始めよう」と呼びかけた。

米中貿易競争にも触れ、「中国が途上国的発想から脱皮し、大国として柔軟に対応できるのか、また中国が現代国家に変われるかの試金石」と話した。（講演要旨は3面に）

2019年度定期総会 ぎふ・中国くるぶ交流講座など 新年度事業を承認

岐阜県日中友好協会は5月25日、岐阜市橋本町の朝日大病院西館ホールで2019年度定期総会を開いた。前年度事業と決算報告の後、若山貴嗣氏（岐阜市議会議員）の補欠監事（1人）選任案、「ぎふ・中国くるぶ交流講座」、岐阜市・杭州市友好都市提携40周年行事への参加など本年度事業計画と事業予算案が承認された。

総会は、杉山幹夫会長の議長で進行。前年度事業と決算報告の主な内容は、日中平和友好条約締結40周年、岐阜県・江西省友好都市提携30周年記念に呼応して実施した公開講座「ぎふ・中国くるぶ」、浙江省杭州市、江西省南昌市訪問、岡山市での第16回日中交流会議参加など。宮本雄二元駐中国日本大使の講演（10月、朝日大学）には110余人が参加。安倍晋

三首相の訪中、日中首脳会談、米中貿易摩擦から覇権争いへの変化という中で、宮本元大使は「一喜一憂せず、当協会のような民間による人と人の交流が大事」と訴えた。

浙江省杭州市訪問では同省対外友好協会、同市対外友好協会幹部との会談が実現し、民間交流の継続で意見が一致。南昌市では記念行事とは別に草の根交流を行った。

本年度事業の主なものは、「ぎふ・中国くるぶ」を交流参加型にブラッシュアップ、年3回の開催を予定。第1回を総会後に開き、杉本勝則氏（北京外大北京日本学中心客座教授）が「この目で見た中国」をテーマに講演した。岐阜市・杭州市友好都市提携40周年行事への参加は、岐阜市が派遣する訪中代表団（10月21日～25日）に役員、会員、賛助者から希望者を募り同行する予定。補欠監事の選任は、役員として長年貢献いただいた畠山信さんから高齢と健康を理由に監事退任の申し出があり、若山氏は残り任期（1年）を務める。



中部6県民間交流会で意見交換

中部6県民間交流会が7月2日、愛知県西尾市のホテルで開かれ、中国駐名古屋総領事館、福井、三重、石川、富山、愛知、岐阜県日中友好協会の代表30人が事業活動を報告し合い、意見交換した。



同総領事館から劉曉軍総領事、孫志勇副総領事ら、各県協会からは会長、理事長ら役員が出席した。最初に劉総領事が先のG20大阪サミットで、習近平国家主席がトランプ米大統領との会談で米中対立の雪解け、日中国交正常化

につながった『ピンポン外交』を取り上げたことに触れ、「この地域は中日友好の先進地。困難な時期を乗り越えられたのは民間外交のおかげ。昨年来の首脳往来で中日関係は正常な軌道に戻った」と述べ、「青少年交流をはじめ、これからも時代の要請に合った更なる民間交流のリードを各協会の皆さんにお願いしたい。」

そのための支援を惜しまない」などと述べた。

中部6県民間交流会であいさつする中国の劉曉軍駐名古屋総領事（左から2人目）
＝愛知県西尾市内のホテル

続いて福井、三重、石川、富山、愛知、岐阜県の順に、前年度事業や取り組みを紹介した。岐阜県は中国をよりよく知るための公開講座「ぎふ・中国くるぶ」、岐阜・江西省友好提携30周年記念に合わせた訪中団の派遣などを発表した。三重

県の取り組みの中で、「私たちにできる次世代交流」をテーマに知事と中国人留学生&日本人大学生のトークセッション、中国人の観光を兼ねた医療ツーリズム視察団の受け入れは、とても参考になった。

◆中国くるぶ日程◆

【第2回】

日時 10月19日（土）
午後1時30分～
講師 加藤隆則氏
（中国・汕頭大学教授）

会場 朝日大病院西館ホール
（岐阜市橋本町）

【第3回】

（新春のつどい）
日時 令和2年2月1日（土）
午前11時～
講師 調整中

会場 グランヴェール岐山
（岐阜市柳ヶ瀬通）



【杉本勝則氏の講演要旨】

中国ってどういう国

国土は日本の25倍、人口は10倍。いい人も悪い人も日本の10倍いる勘定になるが、悪い人はやはり目立つ。日本で報道される中国のネガティブ情報は事実だが、本質的、構造的な問題なのか、中国の一部、一面にすぎないのか考えることが大事。中国は一つの国でなく、先進国（沿岸部）と途上国（内陸部）が併存していると考えればいい。

歴史から見ると、王朝と異民族が入り乱れて勃興と衰退を繰り返し、3000年、東アジアの超大国として君臨してきた。近年では清の乾隆帝時代、世界の富の3分の1を占めたものの、そのわずか60年後（1856年の第二次アヘン戦争）英仏軍により、皇帝の離宮「円明園」を略奪破壊されなど“屈辱の歴史”が始まった。

現政権トップの習近平国家主席が掲げる「中華民族の偉大なる復興」は、アヘン戦争直前までさかのぼる中国の栄光を取り戻すという意が込められている。

超現実的な国民性

国民はどうか。政府はどこまで一般庶民の行動や言論を許容するのか、鋭い嗅覚で見極め、「上に政策あれば下に対策あり」と実にしたたかだ。「お上に任せておけば大丈夫」という日本人の感覚とは大違い。日本人の謙譲の美德は通用しない。自分の考えをきちんと言明するか、反論しないと受け入れたとみなされる。時間の感覚は大陸的だが、利害得喪をきちんと説明すると時間を厳守するから超現実的だ。

わかっていくようでわからない 共産党支配下の中国

日本国憲法は日本人にとって国の最高法規であるが、中国の憲法は前文で共産党の指導の下に社会主義国家の建設をうたう。人権尊重や保障、言論、出版などの自由を認めるが、国家や社会の利益、安全を損なってはならない。それらを決めるのは党と政府だとする。

市場主義をとっていても民主集中制の社会主義国家である。社会主義を目指しているはずが、実態は格差社会。平和・高福祉の日本は、中国人には“成功した社会主義国”と映る。国民による選挙のない民主集中制の構造的欠陥は、権力の横暴から身を守る三権分立がないことだ。

13億人の中国では15人に1人は共産党員で8500万人を擁する世界最大の組織。職場、学校などあらゆるところに共産党の支部が組織され、党書記が長より偉い。政府の方針、政策は各支部の学習会で周知徹底され、テレビで



講演する杉本勝則さん＝朝日大学病院西館ホール

も常時解説している。理解しているかは別にして、フレーズを覚えるのが保身、出世の道とされる。中国は異質な国ではなく、司法制度をはじめ日本と全く異なった制度、違う体制の国であることを認識してほしい。

日中両国の体制の違い

政治家の行動を見る目は、日中では正反対。2012年9月、日中関係学会と中日関係史学会の北京シンポジウムでの出来事。向かいの日本大使館前は、日本の尖閣国有化に反対するデモ隊の怒号で騒然とする中、中国側パネリストから驚くべき発言があった。「野田総理が3度も自衛隊に言及したのは、戦争に踏み切る意思を固めたからか？」。石原慎太郎東京都知事の迷惑などを説明しても中国側は武力衝突が近いと思っていた。またそれ以前の日中懇談会では尖閣諸島に上陸した国会議員の行動を「党や政府の指示によるものか」と問われた。この発言は、日本の国会議員を全国人民代表と同じとみているからだ。

体制の違いに気づかないままの『相互誤解』の積み重ねが日中関係を悪くしている原因だ。

現代中国を歴史の中で見ると

共産党政権の崩壊は起こらないのか。私が国家公務員を退職して中国に留学した時に一番知りたかったことだ。歴史を見て行く、中国人は危機に直面した時、正面から戦わず気持ちを切り替え、環境に適応していく。歴代王朝時代でも社会を安定させ、自分たちの利益を大きく害さない限り支配者は誰だっていい。共産党支配も“天意”のある間は容認しよう。ただし、当局はインテリではなく、庶民の反乱を最も恐れる。それは歴史が証明している。

「中国人は砂の民」と嘆いたのは中国革命の父孫文だった。砂のようにバラバラで自己中心の国民をひとつにまとめるには強大な権力が必要で、国家を超える存在として君臨する共産党はかつての皇帝、現代中国はイデオロギーの衣をまとった歴代王朝を思わせ、国民にとっても慣れ親しんだ統治方法かもしれない。

習近平の手腕に注目

清朝第5皇帝の雍正帝は、無欲で長い部屋住み生活の後、康熙

帝死去に際し、ダークホース的に45歳で皇帝になった人物。汚職対策で権力を集中、言論弾圧をするが、経済にめっぽう明るく乾隆帝に続く清朝繁栄の基礎を築いたとされる。習近平は共産党のトップ（総書記）になるまでの経緯

は、雍正帝と似ている。一般庶民は習の汚職追放政策に拍手喝采し改革に期待した。しかし政治家、高級官僚の汚職は減ったが、街中の拝金主義、警察、官僚の横暴は一段と醜くなっており、庶民層の不満は高まって

いる。米中貿易戦争で、中国が途上の発想から脱皮し、大国として柔軟に対応できるか、中国が歴史的に現代国家に変わるのか、習近平国家主席の手腕が問われている。（文・写真とも土屋康夫理事長）

◇はじめまして◇

「美少女戦士セーラームーン」など日本のアニメに魅せられた少女が日本に憧れを抱くのは自然だった。子どもの頃からの夢がかなった暁には日本の土を踏んでみたいと思うようになった。2019年4月、岐阜県国際交流員として憧れの地に降り立った。

于さんの日本語はよどみない。しかし、2004年に黒龍江大学に入り、日本語を専門とした勉強を始め

るまで全く話せなかった。「日本語は学べば学ぼうど難しいが、日本のことは理解すればするほど好きになりました」。同大学院に進み、日本文学を専攻、詩人で童話作家の宮沢賢治を研究した。「『銀河鉄道の夜』『注文の多い料理店』など、大人が読んでも深い感動を覚えます」と言い、「『雨ニモマケズ』をそらんずる。

中国東北部の黒龍江省大慶市で生まれ育った。省都ハルビンの北西約150キロ、中国屈指の大慶油田で知られる。交通網の整備で省都から車で約2時間、高速鉄道なら約40分。帝政ロシアの雰囲気漂う省都の大学で、教師になる夢の実現に邁進した。

かつて日本ともつながりのあった省都の歴史から日本語レベルは高い。就職先は「競争率の低い」南方の江西省を選び、2011年、省都南昌にある『東華理工大学』の日本語教師に採用され、8年間教壇に。「知識を他人に伝える楽しさ」を教師の使命とい



「中日交流の懸け橋になりたい」と話す于智穎さん＝岐阜市内

い、日本語を初めて学ぶ学生が、ぺらぺらになる成長の過程を見届けられるのは教師冥利」夫と3歳の娘と暮らす南昌はすっかり第2のふるさと。江西省と岐阜県は昨年、友好提携30周年を迎え、「中日交流の懸け橋に」と新たな活躍の場を、日本で語学指導を行うJETプログラムに求めた。交流員の任期は1年。先頃、ハローギフ・ハローワールドin高山に他の交流員と参加、中国の紹介に努めた。

「日本の文化や社会を体感、岐阜県の方々には中国の魅力を発信し、学生たちに日本の魅力を教えられるよう、ここでの時間を大切にしたい」と意欲満々。33歳。